

[書評] 吉田茂・高橋望著 『国際交通論』 世界思想社, 1995年。(257+xviページ)

その他のタイトル	[Book Review] Shigeru Yoshida and Nozomu Takahashi, Kokusai-Kotsu-Ron (International Transportation)
著者	石田 信博
雑誌名	関西大学商学論集
巻	41
号	5-6
ページ	377-383
発行年	1997-02-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019259

〔書 評〕

吉田茂・高橋望著 『国際交通論』

世界思想社, 1995年. (257+xvi ページ)

石 田 信 博

I

本書は国際交通論の体系化をめざして執筆された教科書である。しかしながら、その内容には執筆者二人の高度な専門的研究の成果が随所にみられ、限られた紙幅のもとでコンパクトにまとめられた国際交通問題に関するレベルの高い専門書でもある。

執筆者の吉田茂氏と高橋望氏はともに日本交通学会と日本海運経済学会を中心に活躍している交通研究の専門家である。吉田茂氏は海運問題に造詣が深く、海運産業や海運企業の行動を経済理論や経営理論、統計理論を用いて分析した論文を精力的に執筆し、その業績は高く評価されている。高橋望氏は日本を代表する航空輸送研究者のひとりで、規制緩和をはじめとして航空輸送に関する問題を経済学的、経営学的に分析した論文を多数執筆している。日本における交通研究の中堅を担う両氏によって、国際交通がもつさまざまな側面の体系的理解をめざして執筆されたものが本書である。

II

本書は、国際交通の現状と問題を説明した序章と、海運産業を扱う第I部、航空輸送産業を扱う第II部によって以下のように構成されている。

序章 国際交通の現況と諸問題

§ 1 日本をめぐる国際交通の現況

§ 2 国際交通をめぐる諸問題と本書の対象

第 I 部 海運産業編

第 1 章 海運サービス論

§ 1 経済と海運 § 2 海運サービスの基礎 § 3 海運サービスの需要特性と供給特性

第 2 章 海運業論

§ 1 海運業とは § 2 海運業の基本的機能 § 3 海運業の業務形態

第 3 章 海運市場論

§ 1 海運市場の構成 § 2 海運市場の構造変化 § 3 海運市場の競争構造

第 4 章 定期船海運論

§ 1 定期船サービスと市場構造 § 2 海運同盟の制度 § 3 定期船経営

第 5 章 コンテナリゼーションと定期船海運

§ 1 コンテナ革命と定期船海運 § 2 コンテナリゼーションと定期船市場 § 3 コンテナ輸送と複合一貫輸送

第 6 章 不定期船海運論

§ 1 不定期船市場の特徴 § 2 自由市場の不定期船取引 § 3 不定期船経営の特徴

第 7 章 イングストリアルキャリアッジと不定期船海運

§ 1 イングストリアルキャリアッジと不定期船 § 2 イングストリアルキャリアッジと専用船 § 3 専用船の経営

第 8 章 海運業費用論

§ 1 貸借対照表と損益計算書 § 2 海運業費用の構成 § 3 海運業の費用曲線

第 9 章 不定期船運賃論

§ 1 海上運賃の性質 § 2 不定期船市場の短期運賃 § 3 不定期船市場

の長期運賃

第10章 定期船運賃論

§1 差別運賃とタリフ §2 閉鎖型同盟の市場運賃 §3 開放型同盟の市場運賃

第11章 海運政策論

§1 産業政策と海運政策 §2 海運政策の体系 §3 海運政策の類型

第12章 世界海運と日本海運業

§1 世界海運の諸問題 §2 日本海運業の将来

海運産業編 参考文献

第II部 航空産業編

第1章 航空輸送産業の性質と動向

§1 技術革新と高度成長 §2 航空輸送サービスの特質と経営環境の変化

第2章 わが国の航空市場の発展と航空政策

§1 日本の航空市場の動向と性質 §2 日本の航空企業 §3 日本の航空政策

第3章 米国における航空規制緩和政策

§1 米国国内航空の経済的規制をめぐる諸議論の展開 §2 規制緩和以降の経営戦略 §3 規制緩和の評価

第4章 国際航空輸送の制度的枠組み

§1 シカゴ会議と多数国間協定 §2 ICAO と IATA §3 空の5つの自由

第5章 国際航空における規制と競争

§1 二国間航空協定とバミューダ体制 §2 日米航空協定 §3 航空企業間協定

第6章 国際航空における規制緩和の動き

§1 米国の国際航空規制緩和策 §2 EUの国際航空政策 §3 日本の国際航空政策

第7章 航空サービスの費用

§1 費用分析 §2 航空機材 §3 運航パターン

第8章 航空企業のプランニング

§1 航空輸送サービスの供給システム §2 ハブ・アンド・スポーク型
路線ネットワーク §3 航空企業の経営管理

第9章 航空サービスの需要

§1 市場細分化と旅客の選択 §2 航空輸送需要に影響を及ぼす要因
§3 需要の弾力性

第10章 航空企業のマーケティング

§1 流通チャネル §2 CRS §3 FFP

第11章 航空運賃

§1 日本の航空運賃規制 §2 航空市場の競争激化とイールド・マネジ
メント §3 国際航空運賃の仕組みと問題

第12章 航空貨物

§1 航空貨物の成長 §2 エア・フレイト・フォワードアー §3 コンテナ
化と複合輸送

第13章 空港問題

§1 日本の空港整備制度 §2 空港政策・空港整備制度の諸問題 §3 今
後の課題

航空産業編 参考文献

これからもわかるように、海運、航空輸送ともに、それぞれの基本的な事柄から、制度的枠組み、企業行動、産業構造、産業組織、市場構造、需要特性、運賃、政策に至るまでバランスよくコンパクトにまとめられ、それぞれが手際よく説明されている。記述もわかりやすく、初学者が読む場合でも基礎的な部分から段階的に理解を深めることができるように配慮されている。また部分的には経済学的、経営学的に高度な分析を行っているところもあり、上級の研究をめざす場合の道標の役割をも果たしている。

本書を読むことによって、海運と航空輸送に関する制度と理論、そして現在重要視されている問題が理解でき、国際交通全般が把握できるようになっている。

III

本書は、第I部を海運産業編、第II部を航空産業編として、海運と航空輸送をそれぞれ個別に取り上げている。国際交通において重要な役割を演じている輸送手段は海運と航空であることはいうまでもない。国際交通を体系的に把握するという場合、海運と航空といった輸送手段の違いに関係なく、旅客と貨物の国際輸送を一般的な形式で捉えることが必要であるかもしれない。しかし海運と航空は輸送手段としてみた場合、あまりにも大きな違いがある。本書のまえがきにおいても記されているように、海運と航空輸送はそれぞれの歴史が異なるし、輸送産業として発達した経緯も異なる。輸送サービスを提供するために必要とする技術も異なるし、市場のフレームワークも異なる。そして現時点においては、海運が輸送するものは主として貨物であり、航空が輸送するものは主として旅客である。航空による貨物輸送が伸びてきているといえども、国際輸送において海運は貨物、航空は旅客というパターンは当分の間変わることはないであろう。このように輸送サービスの対象や輸送市場の性格、輸送技術などが大きく違う海運と航空を一体的に扱い、一般的な形式で記述することは無理があると考えられる。海運の問題と航空輸送の問題を個別に取り上げ、海運研究に優れる吉田茂氏が海運産業を、そして航空輸送問題に造詣が深い高橋望氏が航空輸送産業をそれぞれ担当して、それらを並列的な形で記すことにした執筆者二人の方針はまったく妥当であるといえよう。近い将来、国際交通を輸送手段の違いに関係なく、一般的な形式で記述することが要求されるとするならば、それは執筆者二人に与えられる課題であるかもしれない。

IV

本書の序章において、現在の国際交通に関する重要な問題が指摘されている。その問題は、外航海運については(1)便宜置籍船や第二船籍制度に代表されるフラッグイングアウトの問題、(2)船員不足と、船舶の維持管理や船員斡旋を行う船舶管理会社の問題、(3)国際競争力の喪失による日本商船隊減少の問題、(4)コンテナ海運再編の問題、であり、国際航空輸送に関しては(1)世界的潮流となった規制緩和の問題、(2)規制緩和に対応する日本の航空企業の国際競争力の問題、(3)競争の激化による航空企業の国際資本提携の問題、(4)東京・大阪二大都市圏における国際空港の容量不足の問題、であるとしている。これらの問題に関しては本書で説明されているし、また読者自らがそれらを考えるために必要な知識や分析道具も記されている。

これらの問題に加えて、国際貨物輸送における海運と航空の競争の問題も重要であると評者は考えている。国際貨物輸送において、その大部分を海運が担っていることはいうまでもない。しかし一方で、東アジア・東南アジアを中心に軽量の高付加価値貨物や時間価値の高い貨物の航空輸送が伸びてきている。第II部第12章で記されているように、この背景にはトータルコスト概念が浸透したことや、国際分業が発達したことがある。航空が国際貨物輸送において海運の競争相手になりうるのは、重量や体積が小さい高付加価値製品と時間価値の高い製品の輸送に限られるかもしれない。しかし、この分野を中心とした海運と航空の競争は拡大していく可能性が高い。この点に関して、執筆者二人により詳しく分析してもらいたかったという感がある。そして、この辺りの分析が国際交通を一般的な形式で記述するための基盤になるのではと評者は考えている。改めて書くまでもないことであるが、このことは本書の価値を損なうものではない。

V

国際化が社会的に大きく取り上げられるようになってから久しいが、国際化の進展は旅客と貨物の国際移動量を増大させることにつながる。国際交通の重要性が高まることに対して疑いをはさむ余地はない。海運と航空輸送に対して、そしてそれらに関連するさまざまな問題に対して正しい理解と認識をもつことが要求される。本書はそのための最適な文献である。